

怪談

2007(平成19)年8月9日鑑賞<梅田ピカデリー>

★★★



第7章

バカバカしさ
と面白さは
紙一重

監督＝中田秀夫／原作＝三遊亭円朝『真景累ヶ淵』(岩波文庫刊)／出演＝尾上菊之助／黒木瞳／井上真央／麻生久美子／木村多江／瀬戸朝香／津川雅彦／榎木孝明／六平直政／光石研(松竹、ザナドゥー配給／2007年日本映画／119分)

…… Jホラーの旗手中田秀夫監督が描く妖しい日本美の映像は、歌舞伎界のプリンス登場によって独特の世界に……。『年増女の深情け』とはよく言ったものだが、左目の上に傷を負った黒木瞳の熱演にも注目！ 1組の男女と4人の女たちが織りなす、幽玄で悲しい物語を味わいながら、今年の夏は男性と女の業をじっくりと掘り下げて考えてみよう。そうすれば、お盆の過ごし方も、少しは刺激を受けるのでは……？

🎬 久しぶりの日本の美と日本情緒をタップリと

Jホラーの旗手として世界的に高い評価を得ている中田秀夫監督が、5年ぶりの日本映画で一瀬隆重プロデューサーと共に追求したのは、日本の美と日本情緒。そしてその題材は、三遊亭円朝原作の『真景累ヶ淵』。

この映画のキャスティングの最大の特徴は、美しい顔立ちとやさしい心を持ちながら、いやそれを持っていたからこそ次々と女たちとの争いに巻き込まれていく主人公である煙草売りの新吉に、若手歌舞伎俳優の代表格である尾上菊之助を初主演させたこと。他方、艶やかな姿と凜とした心を持った三味線の師匠豊志賀^{とよしが}には、現在の女優陣の中では多くの人がこの人が最適と思える黒木瞳を起用。美しさと雰囲気はもとより、年齢的にもベストマッチ(?)の2人の主人公がいかなるラブストーリーを展開し、「このあと女房を持てば必ずやとり殺す」という実に恐ろしい「怪談」の世界に私たちがどのように誘ってくれるのだろうか……？

日本の情緒を味わえる映画が少なくなっている昨今、中年おじさん・おばさんとはもとより、現在ラブラブ中の若者たちにも是非その日本美と恐さをタップリと味わって

もらいたいものだが……。

■ まずはプロローグの見事さを……

中・高校時代から大学時代にかけて、ながら族でありラジオ人間であった私は、司法試験の勉強中を除いてほとんどいつもラジオをかける生活を続けていた。したがって、歌番組はもとより落語や講談などもよく聴いていたもの。今でもテレビで講談が語られることは時々あるようだが、今ドキの若者はほとんど講談なんて聴いたことはないはず。したがって、三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』も全然知らないだろうが、この映画のプロローグとして登場する、一龍斎貞水が語る講談は圧巻！

3年の間に貸した30両が60両を超えるのはサラ金以上だが、零細金融業者である皆川宗悦（六平直政）が年末の借金の取り立てに来たのに対して、「金はない！」と居直るばかりか、逆に「無礼者、手打ちに致す！」とキレてしまった深見新左衛門（榎木孝明）は無茶苦茶。したがって、「深見様、恨みまするぞ！」の言葉を残して無念の最期を遂げた皆川の死体を累ヶ淵に沈めてしまったものの、深見にはその後その崇りと思われる不幸が連続することに……。そして残された赤ん坊は、使用人の勘蔵（光石研）に引き取られたが……。

■ 豊志賀と新吉は誰の子……？

下総の国、羽生村（現・茨城県常総市）である雪の夜に起きたプロローグが終わると、場面は一転して25年後の江戸深川。私は深川の料亭に今年6月27日はじめて行ったが、昔ながらの江戸の雰囲気を残したまちが深川だ。

深川にある大きな家で、三味線の師匠としてたくさんの弟子に教えている、ちょっといい女が豊志賀（黒木瞳）。他方、今の私たちにはなかなかイメージできないが、昔は煙草売りという商売があったらしい。いかにも勤勉そうな端正な顔立ちの若者新吉（尾上菊之助）は、背中に大きなカゴを背負って、江戸のまちを「煙草いかがですか」と声をかけながら売り歩いているから、こりゃ大変。もっとも、背負っているカゴは大きいけど、中身が煙草ならそれほど重くはないのが助かるどころ……？

それはともかく、ある日、あるところでこの美男・美女がすれ違ったのが運命の出会いであり、『怪談』のはじまり……。なぜなら、この2人はただの美男・美女ではなかったから。すなわち、この新吉こそ勘蔵に育てられた深見新左衛門の息子であり、

他方、豊志賀は妹のお園（木村多江）と共に、帰らぬ父親をいつまでも探し続けた皆川宗悦の娘だったのだから。

ラブシーン比較、『失樂園』 vs. 『怪談』

宝塚の娘役から女優デビューした黒木瞳が、いきなりその美しい裸身を見せたのが『化身』（86年）。これによって第10回日本アカデミー賞新人女優賞を受賞したのは当然と言えるほどの、ラブシーンにおける体当たり演技にはほとほと感心したもの。しかし、その後はどちらかというとなんとも少々出し惜しみ気味……？

ところが、『化身』と同じ渡辺淳一作品で弾けた(?)のが『失樂園』（97年）。ここでは、37歳となって女盛りを迎えた黒木瞳が、そこまでやるかというラブシーン（セックスシーン）を見せてくれたが、これは不倫が堂々とまかり通っている現代のお話。しかし、『怪談』は時代劇だから、ラブシーンも当然抑制されたものに……？ いやいや、中田秀夫監督ならそんなことはないはず……？

日本の時代劇の美しさと恐しさを表現するためには、エロティシズムは不可欠だから、年増女の豊志賀が年下のハンサムな新吉をくわえ込んだラブシーンの濃密さには大いに期待！ さて、その具合は……？

恋は盲目、そして年増女の嫉妬心は……？

新吉と豊志賀が運命の出会いを果たすまでのそれぞれの男関係、女関係については、もちろん全くの白紙。しかし、いったんある場所で、ある状況の中でこの二人が男女関係を結んでからは、状況は急転直下、大きく変わっていった。すなわち、いつの間にか新吉は豊志賀の家に住んでいるし、豊志賀の周辺もそんな新吉に対する賛否、やっかみは別として、それを認容している様子。もっとも、それまでは美人で腕のいい三味線の師匠だった豊志賀に対して、若い男にうつつを抜かしているという悪評判が広がったのはやむをえないところ。しかし、そこは気丈な豊志賀のこと、逆に「それが何さ！」とばかりに文句を言うお弟子さんたちを次々と辞めさせたから、豊志賀の三味線教室は先細りの一途……？

そんな中、豊志賀と新吉のHシーンを目撃した妹のお園は、「死んだお父さんのためにも新吉さんはやめた方がいい」と的確なアドバイスをしたのだが、恋は盲目とはよく言ったもの。若い男の魅力にホレ込んでしまった年増女にそんな助言が通じる

はずはなし！ そればかりか、新吉がかわいい弟子のお久（井上真央）に対してちょっと親切にしていると、たちまち豊志賀はおかんむり。さあ、こんな揉め事、あんな揉め事予感がいっぱいだが、その原因は、すべて恋は盲目という原理から……？そして女の嫉妬心から……？

お岩さんは右、豊志賀は左

新吉と豊志賀の痴話ゲンカ（？）の発端になったのは、このままでは豊志賀に迷惑がかかると考えて、自分が家を出ていくと別れ話を切り出した新吉の発言。妹のアドバイスも無視して、「私には新吉さんがいればいいの」と固執していたのに、当の本人からあっさりと「俺が家を出ていくよ」と言われたのでは、豊志賀はたまらない……。そこで、新吉の身体にしがみついて離れようとしないう豊志賀を新吉が無理矢理振りほどこうとした時、運悪く三味線のバチが豊志賀の顔を傷つけてしまうことに……。バチがこすっていったのは豊志賀の左の目の上だから、こりゃ大変。もともと、傷はついたものの、冷やして時間が経てば治ると思っていたところ、悪いバイ菌が入ったらしく、それが腫れてきたからこりゃ大ゴト……？

『四谷怪談』のお岩さんの顔の傷は右目の上だったが、豊志賀の顔の傷は左目の上。左右の違いはあるものの、女性にとってこんな顔の傷、腫れ物は大変なこと。さあ、新吉はこんな豊志賀に対して、どれだけ献身的な看病をしてやるのだろうか……？

そりゃ、お久の方が……

この映画は、新吉と豊志賀のラブロマンスを軸としながら、年増女の怨みや嫉妬を一身に受けるハンサムボーイと、彼に惚れる女たちの不幸を描くもの。8時間もある古典落語『真景累ヶ淵』をうまく約2時間に編集したものの、その裏返しとして、いくつかの点で人物像の掘り下げが薄いという弱点も……？

そのひとつが、継母のひどいいじめに遭いながら、我慢して豊志賀の家に三味線修行に来ているというお久のキャラ。そのお嬢様風の和服姿を見ていると、現実にとんな不幸を背負い込んでいるのかよくわからない上、下総に住む叔父を頼って江戸を出るというのなら、別に新吉を頼らなくても一人で出ればいいのにと、私などはつい意地悪く思ってしまったが……。それはともかく、注目は、隅田川の花火の夜、偶然新吉の姿をみたお久が、嬉しそうに新吉の元へ駆け寄っていったその数十分後（？）、

二人が今でいう「ラブホ」に入っていったこと。

どういう誘い方、誘われ方をしたのかは、スクリーン上でじっくり見てもらいたいが、やはり、もてる男はちがうし、誘い方もごく自然……？

そりゃ新吉にしてみれば、左の顔が痛い痛いと泣き叫んでいる豊志賀の側で看病しているだけではイヤになり、たまにはお久のような若い女と一緒に、と思ったのは当然……？

しかし、事実上自分が豊志賀に養ってもらっていることや、看病をさぼっている間に、もし、豊志賀に何かが起これば大変と考えれば、若い女としっぽりということは本来出来なかったはずだが……？

この「書き置き」の重みは……

定価800円のこの映画のパンフレットはかなり充実しており、その中には映画評論家佐藤忠男氏の「日本の誇るべき恐怖芸術、怪談の復活」という解説がある。ここには日本の怪談（幽霊）とアメリカのホラー（悪魔）との違いをはじめとするさまざまな分析があり、じっくり読んでみるとこれはかなりの名論文。

そこに解説されているとおり、日本のお盆は死者の霊を家に迎えてもてなし、またあの世にお帰りいただくという儀式だから、日本では現世とあの世の境目はかなり中途半端……？ したがって、『怪談』でも、死んだはずの豊志賀が醜い顔で登場したり、美しい顔で登場したりと変幻自在、さらに新吉の新しい恋人に対してさまざまな悪さをしている姿をみると、新吉に対する恨みの晴らし方はかなり徹底したもの。もっとも、これはあくまで新吉とその恋人に限定しての嫌がらせであり、キリスト教社会における悪魔が誰かれかまわずに悪さをするのは大違い……？

しかも、豊志賀は自分が死ぬ時に「このあと女房を持てば必ずやとり殺すからそう思え」というはっきりとした書き置きを残したのだから、新吉はその書き置きの重みをしっかり感じとらなければならないのは当然。ところが、美男子でやさしいためいつもベッピンから注目され、声をかけられる新吉は……？

女優麻生久美子に対する信頼は……？

7月29日に観たのが佐々部清監督の『夕風の街 桜の国』（07年）。その『夕風の街』編の主演は麻生久美子だった。テレビタレントではなく映画女優を使いたかった

という佐々部監督が、主役として田中麗奈と共に麻生久美子を起用したのは、麻生久美子の女優としての資質を信頼したため。

『怪談』で、羽生村の「下総屋」の主人である三蔵（津川雅彦）の娘お累役で登場するのがこの麻生久美子。お累は、豊志賀亡き後、今度こそ新吉がお久と一緒に羽生村に帰ろうとした時、豊志賀の妨害によって行き倒れとなった新吉を看病する中、新吉に対する愛が芽生えた良家のお嬢サマ。

あの時代に、女の方から新吉と一緒にになりたいと親に頼んだというのは驚きだが、スクリーン上ではそんなストーリーが粛々と展開されていく。

豊志賀の書き置きに縛られていた新吉は「それだけではできません」と断ったのだが、運命の糸はやはり不幸を生み出す方向へ着々と……。いろいろなハプニングを経て、新吉とお累は祝言を交わし、数年後には玉のような男の子が誕生したのだが、これがさらに新たな悲劇を生むことに……。ちなみに、『オーメン』（06年）におけるダミアンも不気味な目でじっと大人たちを見つめていたが、新吉とお累との間に生まれた男の子はひと言もしゃべらないばかりか、父親である新吉を非難するような目でじっと見つめ続けることに。こりゃ、父親としてはたまらないのは当然……。

お園の役割は……???

この映画の主役の一人はもちろん豊志賀を演じる黒木瞳だが、セリフは少ないものの、映画全般にわたって登場し、ラストシーンにおけるお膳立てを整えるのは、豊志賀の妹のお園。しかし、私にはこの映画におけるお園の役割が中途半端に思えてならない。

それはなぜかという、そもそもお園は、父親の宗悦が深見新左衛門によって斬り殺されたという恨みを豊志賀と共にずっと抱いていたのだから、豊志賀が、新左衛門の息子である新吉と夫婦同様の生活をしていることに明確に反対したはず。そして、自分の意見を聞き入れない豊志賀に絶望し、「もう二度とこの家は訪れません」と宣言したはず。

そのお園は今、故郷の羽生村の渡し場の茶屋で働いていたが、そこで偶然新吉を見かけると、甲斐甲斐しく新吉の世話をしやったばかりか、新吉の仕事の世話までも……。一体それは何故……？

父親だけではなく、たった一人の姉までも、仇の息子である新吉によって腑抜けに

され、人生を誤ってしまったと、新吉に恨みを持つのが当然ではないの……？ ひょっとしてこのお園も、新吉のカッコ良さややさしさに、女心が動かされていたの……？

そんな私の疑問は、深手を負いながら、やっと追っ手の追及を振り切った新吉に対して、再びお園がやさしく看病してやっている姿をみると、さらに大きくなっていったが……？ 新吉が茶屋でお園に対してプレゼントした鈴の音が鳴る根付が、こんなシーンで意味をもってくることになろうとは……。

さて、あなたはこんなお園の役割をどのように理解する……？

悪女は悪女らしく

『それでもボクはやってない』(07年)で、カッコいい女性弁護士役を演じた瀬戸朝香が、『怪談』では、深川芸者上がりで、三蔵の愛人のお賤しずの役をうまく演じている。

色気ムンムンの雰囲気を出すのにかなり苦勞したそうだが、お久殺しの証拠品である鎌を新吉に百両で買い取らせようと画策するあたりからは、単なる色気だけではない悪女の匂いがプンプンと……。

一流の女優というのは、どんな役でもうまくこなせるものだと感心しながら見ていたが、このお賤だけは、男の値打ちを顔かたちややさしさではなく、カネを基準として判断している女性。

したがって、全てをビジネスライクに割り切り、①新吉が下総屋から百両を持ち出してくればそれでOK、②それが三蔵にバレて、三蔵と新吉のバトルが始まった以上、三蔵に消えてもらい新たに新吉に面倒を見てもらえばそれでOKと、最も自分に有利になる現実路線を歩もうとしたが、やはり悪女には悪女らしく悲惨な最後が……。

お久殺しは有罪……？ お累殺しは有罪……？

殺人罪の成否を判断するについて難しいのが、心神喪失の主張。すなわち、殺人の実行行為の時、自分のやっている行為の意味を認識できないような精神状態であれば、故意の責任を問うことが出来ないという刑法の理論だ。

『怪談』の場合、新吉は日常生活においては正常だが、いざ自分の惚れた女と一緒に何かをやっているところを、あの世に行ったはずの豊志賀が見とがめた時は、必ず豊志賀からの攻撃が仕掛けられてくることに……。その責任はどちらにあるのかがこ

の映画の大きなテーマだが、もちろんその正解があるのではなく、それを考えさせるところがこの映画の狙い……。

新吉がお久の首を鎌で切りつけたとき、新吉の目の前にあったのは、お久の顔ではなく、自分の首を絞めている豊志賀の顔だった。したがって、それに対して新吉が鎌を振り回したのは、正当防衛であり、場合によれば過剰防衛……？ しかもそれによってお久が死亡したとしても、新吉にはお久に対する殺人の故意は無かったのは当然。したがって新吉は心神喪失で無罪。そう考えるのが弁護士なら当然。

またそれは、新吉がお累の首を絞めた行為についても同じだ。すなわちこれも、亡霊となって現れた豊志賀が新吉を累ヶ淵へ引きずり込もうとしたことに抵抗して、新吉は豊志賀の首を締めたと認識しているのだから……。

お累が首を絞められて死んでいるのを見た新吉が、逃げ出してしまったから追っ手が彼を捜し出し逮捕しようとして必死になったのは当然だが、もしその段階から新吉にしっかりした弁護士がつき、きちんと無罪を主張していれば、ひょっとして落語『真景累ヶ淵』の展開も、映画『怪談』の展開も全然違うものになっていたかも……？

そんなバカな妄想をしながらこの映画を観ていたのは、ひょっとして私一人だけ……？

ラストの舞台は当然累ヶ淵……

この物語の原作が『真景累ヶ淵』と題されているのは、深見新左衛門と皆川宗悦とのトラブルによって、宗悦の死体が沈められたのが累ヶ淵だったから。つまり、いつも深い霧で覆われ、不気味な雰囲気をかもし出す累ヶ淵という舞台がこの物語のキーテーションになっているわけだ。したがって、物語のはじめがこの累ヶ淵に宗悦の死体が投げ込まれるシーンなら、物語の終わりも当然この累ヶ淵が舞台に……。

深く傷ついた新吉を小舟に乗せて漕ぎ進んでいたお園が、運命の糸にたぐりよせられるように、いつの間にか行き着いたところが累ヶ淵。そして、そこに現れたのが、今は醜い左目の上の傷も癒えた美しい豊志賀の姿。やっとな新吉が自分の元に戻ってきたと悟っているためか、今の豊志賀はかすかに微笑んでおり、いかにもやさしく美しい姿。そんな豊志賀の元に、やっとな新吉も心安らかに赴くことができるようになるのだろうが、そんなクライマックスとなる最後の美しい映像は、あなた自身の目で、大きなスクリーン上で是非……。

2007(平成19)年8月13日記